

渡辺 やすさんは、八十六歳。認知症です。

家族と暮らしていますが、日中は一人です。そんなやすさんにとって、心の休まる友だちがいます。私の祖母です。

私は、今年の春休みに、一ヶ月間、祖母の家に滞在し、祖母と一緒に、やすさんと毎日過ごしました。

やすさんは、今から十余年前、夫の次郎さんが他界して以来、東京、逗子、千葉の子どもたちの家を転々としてきました。次郎さんと本当に仲がよかったので、悲しみ方が尋常ではなかったようで、それを子どもたちが心配し、毎月、各家で預かることになったそうです。

ところが、そうして二年が経った頃、家族に、よく首を傾げて、ひとり言を言うようになったそうです。

「今日、何日だったかしら。」

「おじいさんは、いつ会社から戻るって、おっしゃっていたかしら。」

「孝昭（長男、当時、五十五歳）に、そろそろご飯を食べさせないといけないわ。」

家族は、たまりかねて、病院に、やすさんを連れて行きました。診断は、かなり高度の認知症。孝昭さんは、一瞬倒れそうになったそうです。でも、必死に立ち上がりながら、拳を握って、空に叫んだそうです。

「苦労して、私たち八人の子どもを育ててくれた大恩人なんだ。これから恩返しをと思っていたのに。お母さん、どうしたんだよ。」

その日は、朝からどんよりと曇っていました。やすさんの声が、庭に響きました。

「おばあさん、おばあさん、元気にしてる。」

祖母はいそいそと玄関に出ました。その途端、私は、裸足のやすさんに気づきました。

「やすさん、今日は、これから、どこかにお出かけ。」

「ええ、実家まで行くこうと思つて。」

「今日は曇っているから、暑くならないでしょうね。さすが、やすさん。」

やすさんは、自信満々で答えました。

「おばあさんも一緒に来ない。」

私の祖母は、腰を痛め、遠出はできません。すると、祖母は、こう答えました。

「トンボ沼まで一緒するから、その前に、靴を履きましよう。やすさんと私は。」

やすさんが、大きな声で答えました。

「二十三センチ、一緒なものね。」

「やすさんは、よく覚えてるね。私、忘れたわ。でも大丈夫。やすさんがいるからね。」

「そうよ、困ったら聞くのよ、おばあさん。」

祖母は、七十八歳、やすさんは、八十六歳。面白い会話です。でも、私は、やすさんの反応に驚きました。自分の名前も忘れて久しいのに、祖母の顔は忘れない。祖母の質問には、しっかり答えていたからです。また、それ以上に、祖母の問いかけに驚きました。認知症の人のことばを、しっかり受け止め、認知症の人に自信を与えながら接していたからです。

祖母は、トンボ沼まで一緒に行きました。

そして、こう言いました。

「やすさん、私、ひとりじや家に帰れない。」

やすさんは、大きな声で言いました。

「おばあさん、私がいるから大丈夫。さあ、帰りましょう。」

主客逆転と言ったらよいのでしょうか。祖母は見事に、やすさんの徘徊を、やすさん自身の意志で止めたのです。私は、次の日から、やすさんと祖母と、毎日、昔の遊びの話、戦争のときの話、食べ物の話、夢の話をしました。やすさんの夢。それは、次郎さんと結婚することだそうです。照れながら話すやすさんは、少女のようでした。私は、そんなやすさんから、ひとつ学びました。それは、心清く生きた人は、一生、きれいに人生を送れるということです。そして、祖母からも教わりました。友だちは、一生、互角だということです。

四月、私に、ひとり、お年寄りの友だちができました。小島 久子さん、七十二歳。認知症です。小島さんとの出会いは、駅でした。

「あの、出口がわからなくて。」

「あそこですよ。一緒に行きましょう。よく変わるんですよ、出口。」

私は、祖母なら、きつと、こう言うだろうと思って受け答えしました。

「ねえ、家まで一緒してもらっていい。」

「勿論。小島さんのお家が見たいな。」

私は、小島さんが家までの道がわからなくて困っているのだと思いました。見ると、胸に、名札がぶら下がっています。私は、それを何気なく見、駅の案内図で探しました。

「スーパ―がある。郵便局の隣よ。家は。」

「小島さん、すごい。近道よ、それって。」

「そう、昔から勘がいいのよ。」

ことばは、人に元気を与えます。自信も与えます。でも、何より、優しさの交換のだと、私は思いました。今日、学校の帰り、小島さんと会う約束をしています。